

蘭学の普及と地方での実せん

岡山大学大学院教育学研究科教育科学専攻 2020 年度 PBL
「つやま洋学プロジェクト 2 世」 北原綾乃

【意義】

このオンライン教材は、社会・歴史の授業で活用できるオンライン教材を目指して、岡山大学大学院教育学研究科教育科学専攻・2020 年度 PBL 活動の一環で制作されたものである。その内容は、江戸で蘭学を修めたのちに帰郷して地元で活躍した蘭方医の活躍を、地域歴史資料をもちいながら紹介するものであり、小学校社会「国学や蘭学」・中学校歴史「新しい学問・思想の動き」・高校日本史「貿易の統制と対外関係」の単元に対応している。

教科書での「蘭学」は、蘭学者が江戸で翻訳活動をしたことだけでなく、幕藩体制への批判につながったという認識がある。これについて、かつての蘭学(洋学)研究で、洋学の歴史的意義について幕藩体制を補強するものか、批判するものかという見解の対立があった(ただし、「批判」説も、シーボルト事件や蛮社の獄によって、そうした展開は挫折すると評価)。これに対して、佐藤昌介(1988)は、勃興期洋学は、藩医などによって担われた点で封建的性格は否定できないものの、庶民への啓蒙、儒学批判や人間の平等性への注目、身分制批判など封建制批判も内在していた(前野良沢、司馬江漢などの事例)とし、一方で幕末洋学は、寛政期の思想抑圧によってオランダ人との接触制限、洋学のアカデミズム化(在野の諸層への啓蒙放棄)がおこなわれた結果、封建支配者層のための知識・技術へと転落し、化政期には、国際関係の緊迫による幕府の海外知識摂取のため、洋学を幕府の庇護下におかれ権力の独占物になったとして、蛮書和解御用の設置もこの文脈に位置づけている。『厚生新編』についても利用厚生の知識のみで封建的常識に抵触しないものとして翻訳事業がおこなわれたとしている。さらに幕末洋学は、医者を主な担い手とする利用厚生の知識から、武士を主な担い手とする富国強兵的知識へ転換がなされたと評価している。つまり、佐藤は封建制への批判を含むものから、封建制を補強するものへと、時期によって転換したと論じている。

だがこうした評価に対して、田崎哲郎(1985)は、幕末洋学の潮流の分類を、①体制内での立身・為政者への接近を指向した為政者指向型蘭学者と②在地の蘭方医として地域的活動を専らとした在村蘭方医型に分類し、後者については一般庶民出身のものも多く、農民の医療要求の拡大に応える存在であったとする評価から、在村蘭方医に目を向ければ、幕末洋学が決して封建制を補強するもの、武士を担い手とする富国強兵的知識というだけではないことを示す。この点に、在村の蘭学に注目することの意義があるのではないだろうか。

【使用方法】

社会・歴史・日本史の授業内や総合的な学習の時間内での補助教材として、地域の歴史を学ぶ教材として使用可能である。

【イントロダクション／問題設定】

皆さんは、①「蘭学」という言葉にどのようなイメージを持っていますか？もしかしたら、『解体新書』やそれを翻訳した「杉田玄白」という人物を思い浮かべるのではないのでしょうか。確かに、杉田玄白の活躍は、小学校社会から高校日本史の教科書に至るまで、必ずと言っていいほど取り上げられていますね。では、玄白や、一緒に翻訳した前野良沢はどこで翻訳を行なったかご存知ですか？玄白は小浜藩、良沢は中津藩の医師でしたが、②それぞれ江戸の藩邸に仕えていて、江戸で翻訳を行なったのです。彼らが『解体新書』を刊行したことで、海外貿易の窓口であった長崎だけでなく、江戸でも蘭学の研究がはじまり、広まっていくことになります。

では、江戸以外の地方で活躍した蘭学者はいなかったのでしょうか？蘭学は、地方ではどのように広まり、受け入れられ、そして実践されたのでしょうか？この動画では、天然痘の種痘普及活動を事例に、ここ津山の地にて活躍した、オランダ医学に基づいた医者、すなわち蘭方医に注目してみましょう！

○解説

下線部①：蘭学と洋学の違い

蘭学は、江戸時代オランダを通じて日本に入ってきたヨーロッパの学術・文化・技術の総称である。だが、幕末には開国に伴ってイギリスやフランスなど、オランダ以外の西洋諸国とも交流するようになる。そのため「蘭学」という名称で一括して呼ぶことができず、まとめて「洋学」と呼ばれるようになる。

下線部②：参勤交代と江戸屋敷

当時参勤交代の制度によって、江戸と領国の二重生活を送っていた。また妻子を人質として江戸に住ませなければならなかった。そのため大名や多数の藩士は江戸での居住地が必要となり各藩整備された(これを江戸屋敷という)。大名自身や家族の居室、各種の儀礼のための書院などの建設と共に、家臣等の長屋や労働場など設けられていた。江戸屋敷にいる家臣には、江戸詰めとして家族と共に住む者と、家族を地元に残して一時的に詰めている者がいた。大名の江戸屋敷は、上屋敷・中屋敷・下屋敷・抱屋敷などに区別され、この区分は公的な性格の強い順となり、また江戸城からの距離でみると概ね近い順となっている。

江戸の上屋敷は藩主やその家族が生活する場だけでなく、幕府と藩を政治的につなぐパイプ役を果たす。連絡等は幕府⇔藩邸⇔国元の順で伝えられていた。そのため江戸留守居役というのは、藩内での身分や格式では家老や年寄の下であったが、重要な役職であった。

津山藩邸はこうした江戸事務的な場であると同時に、江戸における最先端の学問・芸術を取り入れる場でもあった。江戸文化の発展を先導したのは、幕府の教育機関(昌平坂学問所など)や幕末期の洋学所(蕃書調所)、医学所である。一方、諸大名も寛永～天和年中ごろから、その城内や領内枢要地に藩校を設け、江戸藩邸内でも儒者を招聘して月並講釈させる傾向が生じた。この大名個人の家塾的・月並講釈的形態を脱却して名実ともに藩立の総合大学化するのは、天明以降である。よって藩校中心の学問交流は国許、江戸藩邸間のみならず、他藩の儒学者や洋学者同士の学問研究の拠点となっていた。津山藩では西洋の学問を身につけた宇田川家や算作家など優れた学者が江戸で活躍することで、情報の発信基地ともなり、文化人・知識人のサロンのような役割を果たしていた。

【蘭学とは？】

本題に入る前に、「蘭学」とはどのようなものか、ここで簡単に確認しておきましょう。

「蘭学」とは、江戸時代にオランダを通じて日本に入ってきたヨーロッパの学術・文化・技術の総称になります。それを研究する人たちのことを「蘭学者」といい、彼らの主な活動は杉田玄白の例に見られるように、オランダ語で書かれた書物を研究し、それを日本語に翻訳することにあります。また③江戸幕府は海外事情を調査する目的で、外国文書の翻訳機関を設置しました。

津山藩の医師である宇田川玄随、その跡をついだ玄真や榕菴は、実は江戸で活躍する蘭学者でした。杉田玄白らが翻訳した『解体新書』や、宇田川玄随らが翻訳・刊行した医学書は、④「蘭方医学」として世に知られるようになり、これに刺激を受けた各地の医師が江戸に集まり、そこで蘭学を修めるのです。

○解説

下線部③：蛮書和解御用・蕃書調所

遊学後、江戸に滞在する者の中には幕府が設置した蛮書和解御用で働く者もいた。それは、1811(文化8)年に幕府天文方におかれたオランダ語書物の翻訳機関である。1853(嘉永6)年のペリー来航及び安政以降の西欧諸国との条約締結を契機として、洋式軍事技術の導入による軍事力強化と外交事務処理能力の向上が課題となり、その2つの課題を遂行するうえでそれぞれ必要となる洋書翻訳と洋学教育を担当する機関の設置が、老中阿部正弘のもとで企画・推進され、1855(安政2)年に洋学所が発足した。翌1856(安政3)年に蕃書調所と改称し、1868(明治元)年まで存続。ここで活躍した津山藩の蘭学者には、宇田川玄真・榕菴・興斎、算作阮甫が挙げられる。

下線部④：蘭方医学

蘭方医学(オランダ医学)とは、オランダ商館の医師によって主として伝えられた医学である。そもそも江戸の学問としての医学の主流は、幕府が朱子学を官学に採用したこともあって、陰陽五行説など中国古来の理論を基礎とする漢方医学であり、漢方や儒学を学ぶのが一般的であった。時代が下るにつれ、医界における臨床・経験重視の風潮や、より効果のある技術への指向性が高まり、それは蘭方医学の萌芽となった。『解体新書』が出版されたことで、事実として蘭方医学を志す者が多くなったが、なお日本の医学の大勢は漢方医学が占めていた。だが開国に傾くにつれ、幕府は医学の面でも従来の漢方医学一辺倒から西洋医学へ目を移さざるを得なくなった。その表れの一つに安政4年(1857)に医学教師としたオランダからポンペ＝ファン＝メールデルフォールトを招き、公に西洋医学教育を行わせた。ちなみに当時の江戸の基礎的教養は儒学・漢学であったが、蘭方医学伝来後もそれは変わらない。蘭方医も最初は儒学・漢学を学んでから蘭方医学を学ぶのが一般的であった。

【帰郷した蘭学者たち】

では、蘭方医学を学んだ彼ら⑤地方の医師たちは、その後どうしたのでしょうか。彼らのなかには彼らのなかには江戸に留まって開業する人もいれば、⑥帰郷して地元の医療や教育に携わった人もいました。ここでは、江戸で蘭方医学を学んだのち、津山に戻って活躍した2人の医師を紹介したいと思います。

まずは⑦仁木永祐です。1830年(文政13年)に津山の近郊で生まれた永祐は18歳の時に江戸に出て、津山藩の蘭学者である箕作阮甫や宇田川興斎から蘭方医学を学び、他にも様々な学問を学びました。津山に戻ると、永祐は医師として働くとともに、「靱山黌」(もみやまこう)という私塾を開いて子どもたちの教育に努め、明治時代になると自由民権運動にも参加しました。

二人目は⑧原村元貞です。1828年(文政11年)に今の岡山県勝央町で生まれた元貞は、津山藩の医師から医学を学んだあと、江戸に出て同じく箕作阮甫らから蘭学を学びました。その後、帰郷すると元貞は地元の医師として働きました。

○解説

下線部⑤：医師になる手順

江戸時代、医師になるには次の手順を踏むのが一般的であった。

- ①自分が住んでいる地域の手習い師匠から、基礎的な教養を学ぶ
- ②その中でも優秀な者が、近隣の町や村の医師のもとへ弟子入り、そこで医学の初歩を習う
- ③師匠の同意が得られると、高度な技術を習うために近くの都市へ出向き、医学塾で鍛錬
- ④三都(江戸・京都・大坂)や長崎など、医学の先進地へ遊学する。

下線部⑥：在村蘭方医

蘭方医学を学んだ後、帰郷してその地で医業活動をする者を「在村蘭方医」という。今回この動画では仁木永祐と原村元貞を紹介したが、他にも小林令助や秋田周甫などがある。在村蘭方医は各地に存在していた。例えば、三河国額田郡宿村(現在の静岡県湖西市)の宇都野氏、伊予国宇和郡八代村(現在の愛媛県八幡浜市)の清家堅庭などがある。また彼らの中には医業活動だけではなく私塾を開くなど教育活動に携わった者もいた。

【在村蘭方医に関する文献】

在村蘭方医の主な先行研究については以下の通りである。

〔岡山県〕

- ・ 青木歳幸『在村蘭学の研究』株式会社思文閣出版, 1998 年.
- ・ 岩本伸二「幕末期在村医の組織化への方向—美作津山の場合—」『岡山県史研究』4 号, 1982 年.
- ・ 下山純正『徳川日本の洋学者たち』東京堂出版, 2019 年.
- ・ 田崎哲郎『在村の蘭学』名著出版, 1985 年.
- ・ 同編『在村蘭学の展開』思文閣出版, 1992 年.
- ・ 中山沃『岡山の医学』日本文教出版, 1971 年.

〔愛媛県〕

- ・ 井上淳「幕末期在村蘭方医の医療と活動—清家堅庭の足跡—」『国立歴史民俗博物館研究報告』116 集, 2004 年.

〔静岡県〕

- ・ 田崎哲郎「在村蘭方医の一樣相 三河国額田郡本宿村宇都野氏の場合」『愛知大学文学論叢』69 号, 1982 年.

【全国】

- ・ 青木歳幸・岩淵令治編『国立歴史民俗博物館研究報告』第 116 集, 国立歴史民俗博物館, 2004 年. ※愛媛県でとりあげた先行研究もこの中に記載されている。

下線部⑦：仁木永祐

仁木永祐の経歴は以下の通りである。

西暦(和暦)	年齢	主な出来事
1830(文政 13)	1	美作国東北条郡下津川村(現在の津山市加茂町下津川)で生まれる
1843(天保 14)	14	津山藩儒士稲川雪洞・永田半眉に師事
1846(弘化 3)	17	津山藩医村山春庵に漢方・外科を学ぶ
1848(嘉永元)	19	美作国東南条郡靱山村(現在の津山市靱保)で医師の仁木隆助の長女たけと結婚

同		津山藩医箕作阮甫・同宇田川興斎に蘭方 昌谷精溪に漢学を学ぶため江戸へ遊学
1853(嘉永 6)	24	後藤松陰に師事して漢学を学ぶため大坂へ遊学
1855(安政 2)	26	帰郷し私塾「靱山黌」を開設
1856(安政 3)	27	4年かけて種痘の普及に尽力
1860(万延 1)	31	官許を得て「靱山黌」と命名
1873(明治 6)	44	美作血税一揆の運動に参加
1876(明治 9)	47	田地用水溜池民有据置請願運動に参加
1879(明治 12)	50	両備作三国親睦会結成
1881(明治 14)	52	津山中学校経費負担問題の運動に参加
1882(明治 15)	53	美作自由党結成
1903(明治 35)	73	死去

・仁木永祐の功績(1) 靱山黌の創設

靱山黌という呼称は明治以降のもので、最初期は医学研究所と呼ばれていたようである。その開校は1860(万延元)年であるが、初代会頭である林竹造を招聘するにあたり、待遇面で仁木永祐との間でいざこざがあったようである。そのため、開講は翌年二月となった。医学研究所設立の最大目的は医師の学術向上であった(幼年の者にも開かれており、その場合は「医俗ともに」といった形での教育が行われた)。ここで、仁木永祐は医学研究所の設立に当たって外部講師の招聘、待遇面での話し合いに関して、津山藩の儒士大村桐陽らと連携して対処していきながら、奔走していた。しかし、仁木永祐自身が医学研究所で教鞭をとっていたかどうかに関しては明確にされていない。医学研究所の教育内容は全て医学教育に偏っていたわけではなく、むしろ儒学や漢学などの基礎教育に重点が置かれていた。というのも、医学の講習に関しては在地の医師から講師を招き、漢籍の講師は多額の礼を積んでわざわざ外部から招聘しているなど、実態は医師のモラルに漢籍から道德教育を通してアプローチをかけるものであったようである。加えて、教育対象の年齢は幼年の者からなどと幅広く、後に名前から医学が取られて、「靱山黌」とされるなど、郷学的な側面が強かった。靱山黌は1873(明治 6)年の学制発布に伴い閉鎖されているが、その関連性を見るに、医学研究所としてだけでなく、地域における教育機関としても役割を強く果たしていた。

仁木永祐は以上のような教育機関運営に、医師としての立場、在村知識人としての立場を十二分に発揮し、多大な貢献をしていた。なお、靱山黌からは仁木永祐と共に自由民権運動に参加する人物を輩出しているなど、仁木永祐の後の活動にも大きく関連していく。

・仁木永祐の功績(2) 自由民権運動の参加

1871(明治 4)年に美作三県(津山、真島、鶴田)は全て北条県に合併され、1876(明治 9)年に岡山県に合併される。調査の限りでは、仁木永祐が直接関与した行動は1881(明治 14)年に発足した美作親睦会の後の会合における発起人としての記載、1882(明治 15)年の自由党美

作地方部設置に伴い、東南条郡の党員として名を連ねていた。これらは国会開設運動に関して美作全域を巻き込んで広く意見交換をして推進していこうというものである。このように国会開設運動に深く関与する運動と政党に直接参加していることにも勝り、これらの運動の中心となった安黒基、井手毛三などは前述の靄山齋の出身者であり、同じくこれらの発起人として活躍した中島衛は自由党美作地方部結成の際に、自由党の幹部林包明の招聘に当たり、美作内の有志の考えを取りまとめる手順などに関し助言を賜るなど、間接的に美作の自由民権運動の功労者として多大な役割を果たしていた。美作において展開される自由民権運動はその範囲を着実に広げ、自由党の地方部を設立することになる。のちに板垣退助を招くことにもなり、仁木永祐は後にその功績を「美作の板垣」と称されることとなる。

下線部⑧：原村元貞

原村元貞は幕末から明治にかけて産科・小児科を専門とし、天然痘普及活動に尽力した。元貞の経歴は以下の通りである。

西暦(和暦)	年齢	主な経歴
1828 (文政 11)	1	美作国勝北郡石生村(現在の勝田郡勝央町石生)に医師原村秀達の長男として生まれた
?	?	津山藩の医者野上玄同で医術を習う
1843(天保 14)	15	箕作阮甫・竹内玄同に蘭学・外科を学ぶために江戸へ遊学
		大槻俊斎のもとで小児科を習得
1849(嘉永 2)	31	父秀達の急逝により帰郷し開業
同		鳥取に種痘をもたらした原田謙堂が種痘伝来のために津山来た際、元貞は謙堂を伴い津山藩医野上邸を訪ねる
1907(明治 39)	80	死去

元貞の祖父貞輔は元松江藩医と伝えられるが藩を辞して勝北郡石生村で漢方医を開業する。医業の傍ら寺子屋を開き子弟教育を行っていたという。元貞も自ら「博愛堂」と称する寺子屋を開き、教育活動を行っていた。

【天然痘と戦う在村蘭方医】

さて突然ですが、ここでクイズです！ここで紹介した彼らは、津山に戻るとある共通の活動に尽力していました、この3択のどれだと思いますか？

正解は、③の天然痘の種痘普及活動でした。「天然痘って何？」「種痘って何？」というその貴方のために、ここで簡単に説明しましょう。⑨天然痘とは、世界中で流行した感染症の一つで、「疱瘡」とも呼ばれていました。感染すると全身にほっしんが出てしまい、死亡率がとても高い病気でした。また、治ったとしても顔や全身に痘の痕が残ってしまうため、忌み嫌われていました。そのため、天然痘に罹らないようにするにはどうしたらいいのか、その予防法の研究が進められていました。

1796年、イギリスの医師ジェンナーが画期的な予防法を発見しました。それは、人間にも感染する牛の病気「牛痘」を用いて天然痘を予防する方法を発見したのです。これを⑩「牛痘種痘法」といいます。

日本には、オランダ船によって、1821年にはじめて牛痘種痘法のための痘苗が伝わりました。しかし長い船旅で痘苗は効力を失っていました。その後も何度も輸入に失敗し、ようやく日本で接種が成功したのは1849年（嘉永2年）7月のことで、長崎を起点に、佐賀から萩・広島、京都・大坂・福井、江戸と、各地へ伝わっていきました。

そして、⑪現在の岡山県域に伝わったのは1850年（嘉永3年）正月のことでした。現在の岡山市北区足守を中心とする地域にあった足守藩が藩医で蘭学者の緒方洪庵を呼び寄せて除痘館を設立し、種痘の普及・実践に努めました。その後、⑫津山藩の医師がすぐに、足守へ赴いて洪庵から痘苗を分けてもらい津山でも2月から種痘の普及に努めたのでした。

○解説

下線部⑨：天然痘(疱瘡)

天然痘は伝染病の一つ、ウイルスによって起こり、感染力が強く死亡率も高い病気で、症状としては高熱を発し、悪寒・頭痛・腰痛を伴い、解熱後に発疹を生じ、永久に痘痕が残る。そもそも天然痘はインドに原発したもののようで、約2000年前のインドの仏典に天然痘の記載があり、エジプトで発見されたミイラの顔に天然痘の跡を示す痘痕が残っており、天然痘は古くから人類の脅威の一つであった。日本では『続日本紀』に奈良時代の735(天平7)年に大流行した記録があり、以降明治に至るまで100回にも及ぶ大小の流行を繰り返していた。

下線部⑩：人痘種痘法と牛痘種痘法

「人痘種痘法」

古来より行われる予防接種、皮膚に小刃で小さな傷を作り、天然痘の感染者のかさぶたや膿を薄めたものを擦り込み、免疫を高める方法

インドからトルコ経由でヨーロッパへ、また中国経由で日本に伝わり、江戸時代中期から一部の医家によって試される(緒方洪庵、美作国：石井宗謙など)。

「牛痘種痘法」…1796年にイギリス医師ジェンナーによって発見

牛の乳搾りをする女性が天然痘に罹らないことに着目、女性の手に感染した牛痘(牛の天然痘)を少年に接種、再度少年に天然痘感染者の膿疱痘漿を接種することを試み、結果は予想通り感染せず→世界へ普及する

下線部⑪：岡山への伝来

日本へ牛痘種痘法伝来から岡山までに伝わるまでの経緯を表したものは以下の通りである。

西暦	場所	主な出来事
1823 年	長崎	出島の蘭商館医師シーボルトが着任 持参した痘漿(膿汁)を用いて日本人に種痘を行うが失敗
1849 年 6 月	長崎	オランダ商館医モーニッケによって痘痂(かさぶた) がもたらされる
同年 7 月	長崎	佐賀藩医櫛林宗建が牛痘苗を三男と通詞の子 2 人に接種し、 三男のみ善感⇒牛痘苗による種痘に初めて成功する
同年 8 月	佐賀	佐賀藩領へ牛痘苗がもたらされる
同年 9 月	京都	牛痘苗は唐通詞頼川四郎左衛門により 京都の医師日野鼎斎へ譲られる
同年 10 月	京都	日野鼎斎、除痘館設立
同年 11 月	大坂	緒方洪庵、鼎斎を助けるために福井から駆け付けていた越前 福井藩蘭方医笠原良策から痘苗入手 太和屋喜兵衛の助言を受けて大坂古手町に除痘館を設立 その後まもなく「除痘館種痘啓蒙」を発行
1850 年 1 月	岡山	緒方洪庵、足守藩主の命により帰郷 足守に除痘館設立

下線部⑫：津山における種痘

津山における種痘活動は以下の通りである。

西暦	主な出来事
1850 年 1 月	緒方洪庵、足守藩主の命により帰郷、足守に除痘館設立
同年 2 月	津山藩医野上玄博、緒方洪庵から分苗を受ける
1860 年 3 月	藩医丸尾玄俊・久原宗甫・野上玄瑞・野上玄雄により、除痘館設立 →藩の公認を得る

【牛痘種痘法への疑念】

ここまで動画をご覧になった皆さんは「こうして牛痘種痘法が蘭学者によって広められ、みんな接種して天然痘に罹る人はいなくなったんだろうな～」と思ったのではありませんか？ところが、現実はそのように甘くはありませんでした。「牛痘種痘法」の効果は科学的にも証明されていたのですが、「本当に効くの？」とか、牛の膿を使用するので接種すると「角が生える」といった根も葉もない噂が広まるなど、なかなか世間では受け入れてもらえなかったのです。

【疑念や噂を払拭するために】

それは津山でも同じでした。では、蘭方医は、牛痘種痘法に対する疑念や噂を払い去るためにどうしたのでしょうか？

彼らはこのとき、種痘の効果や安全性、接種を呼びかけるためのチラシをつくったのです。その原物は津山洋学資料館に保管されています。これがそのチラシで、⑬「種痘啓蒙引札」と呼ばれています。ここには次のように書いてあります。①の部分では、西洋から伝わった「牛痘種痘法」は効果があり、接種すると、その部分には痘ができるが他の部分にはできず、再び天然痘に罹らないということが書かれています。②では、すでに長崎や佐賀、萩、福井、足守などで多くの人が接種し、また京都や大坂では除痘館が開かれ、種痘の効果が高かったことであるということが書かれています。③では、イギリスの医師によって発明されて以来、数百万に接種し、接種を受けたもので疱瘡に罹ったものはいないと書かれています。そして④では、緒方洪庵から譲りうけて、津山でも種痘接種を広めていくということが書かれています。このように、津山の蘭方医たちは牛痘種痘法の効果や安全性を説明して、種痘を接種するよう訴えたのです。そしてこのチラシをよく見てみると、漢字の横にふりがなが振られているのが見えますね。ここから、多くの人に読んでもらおうという彼らの信念が感じとれます。仁木永祐や原村元貞も、きっと同じように普及に尽力したのでしょう。津山でも牛痘種痘法が広まるようになったのです。その後、⑭種痘の普及により天然痘の発生率は減少、1980 年 5 月に WHO は天然痘の世界根絶宣言を行い、現在も世界中で天然痘は発生していません。人類にとって天然痘は、史上初の唯一根絶に成功した感染症となりました。

○解説

下線部⑬：種痘啓蒙引札

1850(嘉永3)年1月に足守に徐痘館の開設後、津山藩医の野上玄博はすぐに洪庵から痘苗の分与を受けた。その際緒方洪庵が玄博に「分苗免状」を出している。玄博はすぐに津山へ戻り、翌2月民衆に種痘を受けるよう、その伝来と効果や安全性を謳った「種痘啓蒙引札」(チラシ)を出した。このことから津山で種痘が開始されたのは1850(嘉永3)年2月以降であることがわかる。「種痘啓蒙引札」の原文は以下の通りである。

去年西洋より伝来の痘苗ハ、従来の種痘と違ひ唯左右の臍に種て、小児ハ三四顆、大人ハ二十顆許其部にのミ疱瘡を發せしめ、顔ハ勿論総身にハ一点も出さず熱も格別起さず、見點。起脹。灌膿。結痂。大抵尋常のほうそうのことごとくに遂終り、再び自然痘を感ざる事、決して間違なき靈妙不思議の療法にして、已に長崎ハ勿論のこと、肥前佐嘉、長州萩、越前福井、備中足守等にてハ官府より命令を下し数千人に種、京都大坂にてハ除痘館を開キ数百人に種て、其確實なることを試したるなり、此法ハ原来、英吉利国にて、寛政年中の頃イ、ン子ルという人始て發明し、当今二いたる迄六十年來、数百万人に施し行ひしに、其後疱瘡せしもの一人もなしといふ唐土にてハ、澳門といふ処にて邱洪川という人始て此法を伝へ受け、数千人ニ行ひしに、西洋人のいふに毫も差ハずして、引痘新法全書という書を著ハせり、実に往古より疱瘡にて死亡者幾億万人といふ数をしらず、たとひ免死者も醜態となりて生涯を送ること、嘆敷の至りならずや、故に普く緒人をすくわんため、此度有故て大坂緒方氏より右の痘苗を乞求め、種痘療法を相弘め申すものなり

嘉永三年戊二月 津山 野上氏

【用語】

- ・イ、ン子ル...ジェンナーのこと
- ・唐土...中国
- ・澳門...マカオ

主な内容は、種痘の効果、すでに実践された場所、種痘の伝来、中国での実践、緒方洪庵から牛痘苗を譲り受けてもらい津山でも種痘を広めることが記されている。この引札の文面は、1849(嘉永2)11月に大阪除痘館で発行された種痘啓蒙引札に酷似しており、玄博がこの原文を入手し、それに加筆・印刷したと思われる。また原文にはふりがなもふられており、多くの人に見てもらおうとする意図が感じられる。

【野上氏】

野上家は産科を旨とした津山藩医の一家であったため、蘭方医ではない。野上玄博は箕作阮甫や緒方洪庵との交流があり、その人脈から分苗を受けたとされている。「種痘啓蒙引札」には野上氏と書かれているだけなので、2006年までこれが玄博かそれとも息子の玄瑞なのか不明であった。だが、2006年に緒方洪庵から玄博に痘苗を分け与えた時の「分苗免状」が発見された。これにより譲り渡された相手は玄博と明確になったのである。

下線部⑭：天然痘根絶までの道のり

明治以降の日本・世界の動きについて以下の通りである。

西暦(和暦)	主な出来事
1876(明治 9)	「天然痘予防規則」によって種痘(予防接種)義務
1885(明治 18)	「種痘規則」公布
1909(明治 42)	「種痘法」公布
1948(昭和 23)	「予防接種法」公布
1956(昭和 30)	日本国内で最後の発生
1976(昭和 51)	定期種痘停止
1977(昭和 52)	ソマリアで自然発生による
1980(昭和 55)	WHO(世界保健機構)天然痘の世界根絶宣言 →「人類が根絶できた唯一の感染症」

【種痘活動に関する先行研究】

天然痘・種痘に関する先行研究は数多くある。その中でも種痘普及活動についての先行研究を紹介する。在村蘭方医の中で紹介した先行研究の中にもあるが、その他については以下の通りである。

- ・ 青木歳幸他編『天然痘との闘い【九州の種痘】』岩田書院, 2018 年.
- ・ 浅井允晶「谷景命と幕末大和郡山における種痘普及事業の展開(日本史学科) 榎本家文書を巡って」『堺女子短期大学紀要』20 号, 1985 年.
- ・ 緒方洪庵記念財団除痘館記念資料室編『大阪除痘館の引札と摺りもの』緒方洪庵記念財団除痘館記念資料室, 2018 年.
- ・ 田崎哲郎『牛痘種痘法の普及』岩田書院, 2012 年.
- ・ 古西義麿「明治期の種痘普及と大坂の除痘館 和歌山県橋本市の一事例」『洋学』13 号, 2004 年.
- ・ 深瀬泰旦『天然痘根絶史』思文閣出版, 2002 年.
- ・ 松木明知「幕末の弘前藩における痘瘡流行と牛痘種痘普及の実態—豪商金木屋又三郎日記による研究—」『日本医史学雑誌』43 号, 1997 年.

【最後に】

この動画で使用した資料・参考文献は以下の通りです。この動画では、蘭学を学んで津山に戻ってきた医師たちが、どのようにして天然痘の種痘を普及させていったかについて紹介しました。彼らは天然痘の種痘を広めるといった医療行為を通じて、津山の地で「蘭学」の内容を実践していたことがわかりいただけたかと思います。今回の話は教科書には書かれていないけれども、津山と蘭学の関係を知る上でとても大切な歴史の1コマであり、意外な発見もあったのではないのでしょうか。津山洋学資料館には、今回の動画では紹介できなかった「蘭学」や天然痘、種痘に関する記録がたくさんあるので、ぜひ津山洋学資料館に来て確認してみてください。ご視聴ありがとうございました。

以上がこのオンライン教材に関する解説である。この動画は教育現場のみならず、一般の方にも見てもらう意図をもって作成されている。動画自体は内容を簡略しているところが多々あるので、この解説書で補ってもらいたい。

【参考文献】

- ・ 青木歳幸『在村蘭学の研究』思文閣出版,1998.
- ・ 青木歳幸他編『天然痘との闘い【九州の種痘】』岩田書院, 2018 年.
- ・ 岩本伸二「幕末期「在村医」の組織化への動向:美作津山の場合」『岡山県史研究』第4号, 1982 年.
- ・ 海原亮『江戸時代の医師修行 学問・学統・遊学』吉川弘文館, 2014 年.
- ・ 緒方洪庵記念財団除痘館記念資料室編『大阪除痘館の引札と摺りもの』緒方洪庵記念財団除痘館記念資料室, 2018 年.
- ・ 『国史大辞典』第2巻「オランダ医学」項（大鳥蘭三郎執筆）吉川弘文館, 1980 年.
- ・ 『国史大辞典』第11巻「蕃書調所」項（梅沢ふみ子執筆）吉川弘文館, 1990 年.
- ・ 『国史大辞典』第14巻「洋学」項（沼田次郎執筆）吉川弘文館, 1994 年.
- ・ 佐藤昌介『洋学史の研究』中央公論社, 1980 年.
- ・ 佐藤昌介『洋学史研究序説』岩波書店, 1988 年.
- ・ 下山純正「美作在村蘭学概論」田崎哲郎編『在村蘭学の展開』思文閣出版, 1992 年.
- ・ 下山純正『徳川日本の洋学者たち』東京堂出版, 2019 年.
- ・ 田崎哲郎『在村の蘭学』名著出版, 1985 年.
- ・ 同『牛痘の普及』岩田書院, 2012 年.
- ・ 津山郷土博物館編『津山藩の江戸屋敷』津山郷土博物館, 2001 年.
- ・ 原平三『幕末洋学史の研究』新人物往来社, 1992 年.
- ・ 深瀬泰旦「天然痘、その流行と終焉」酒井シヅ編『疫病の時代』大修館書店, 1999 年.

- 深瀬泰旦『天然痘根絶史』思文閣出版,2002 年.
- 丸山雍成『参勤交代』吉川弘文社,2007 年.